

聖書：第一列王記7章27～39節

説教：神殿と天の御国

はじめに

ソロモンは、神から特別に知恵を与えられて王の座に着いてすぐに、父ダビデが果たすことのできなかった神殿建設のことを考え始めます。というのは、神がダビデにかつてこのように語っていたからです。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国を確立させる。」(二サムエル記7章12, 13節)

「あなたの身から出る世継ぎの子」とは、自分のことなのか。そのことを主に問いかけてきました。具体的に言えば、神殿を建てるためには材料と職人が足りません。もし主の御心ならばこの問題が解決されるであろう。そう考えます。そうすると、ツロの国の王ヒラムがソロモンを全面支援するとの申し出がありました。このことがあって、ソロモンは神殿建設に本格的に着手することにしました。

七年の歳月をかけて神殿を完成した後、次のステップとして、ソロモンは外国から青銅職人であったヒラムを招いて作らせませす。先週は、ヒラムが神殿の玄関の前に立てる二本の柱と、「青銅の海」と呼ばれる大量の水を入れておくタンクを作ったことを見ていきました。

今日はその続きで、青銅で十個の台と洗盤を作ったところを見ていきます。前回もそうですが、この箇所もこまごまとした説明が続きます。こんなことが何の役に立つのかと疑問を覚えます。これもいつも言っていること

ですが、信仰に関係がないのなら聖書は載せるはずはありません。関係があるから載せている。それはどういうことなのか。そのことを一つずつ解き明かしていきたいと思えます。

1 十個の台と洗盤

1) 洗盤

まず27節を読みます。「彼は青銅で十個の台を作った。おのおのの台は長さ四キュビト、幅四キュビト、高さ三キュビトであった。」とぼして三十八節。「ついで、彼は青銅で十個の洗盤を作った。洗盤の容量はそれぞれ四十バテ、それぞれ直径四キュビトであった。洗盤は、一つの台の上の一つずつ、十個の台の上にあった。」

いったいどんなものか、絵で見た方が早いので、週報に載せてあります。細かな所はわからないのですが、だいたいの様子がわかります。四十バテは、お風呂であればおよそ4杯分くらいになるでしょうか。洗盤とはその名前の通りに洗い物をするための水を入れておくボウルのようなものです。いったい何のためにこれを作ったのか。

2) 全焼のいけにえをすすぎ清める

並行箇所である第二歴代誌4章6節にあります。「それから、洗盤を十個作り、五個を右側に、五個を左側に置いた。その中で洗うためである。全焼のいけにえに用いるものは、その中ですすぎ清めた。海は祭司たちがその中で身を洗うためのものであった。」

「海」というのは、前回見ました「青銅の海」と呼ばれて大量の水を蓄えておく丸い形をしたタンクのことです。いっぽう洗盤に蓄えられた水は、全焼のいけにえを焼く前に動物をすすぎ清めるために使われると書いてあります。

2 不思議な台の構造

1) 雄獅子、牛、ケルビム (29 節) とケルビム、雄獅子、なつめやしの木 (36 節)

これで洗盤の使い道もわかりましたが、そんなことならば数行書けば済む話です。なぜこんなにながながと書くのでしょうか。なにか理由があるはずですが、手がかりは繰り返されていることばです。いくつかあるのですが、今日は 29 節と 36 節に目を留めます

まず 29 節を見ます。「わくにはめられている鏡板の上には、雄獅子と牛とケルビムとがあり、雄獅子と牛の上と下にあるわかうの表面には花模様が鑄込んであった。」

そして 36 節を見ます。「そのささえの表面と鏡板には、それぞれの場所に、ケルビムと、雄獅子と、なつめやしの木を刻み、その周囲には花模様を刻んだ。」

29 節と 36 節をよく見比べてください。繰り返されていることばはどれですか。「雄獅子」、「ケルビム」、「花模様」、これが繰り返されています。逆に繰り返されていないのはどれでしょう。「牛」です。36 節では「牛」がいなくなって、その代わりに「なつめやしの木」が登場します。デザインするなら、全部同じ柄にしたほうが統一感があります。思いつきでたまたまこうなったのか？そうではない。ソロモンは神の知恵をいただいて神殿を建てようとしているのです。一つ一つの細工も神の知恵であるはずですが。

2) 洗盤の口 (31 節)

そう言われても、これだけでははっきりしない。そこで 29 節と 36 節にはさまれた真ん中の 31 節に何が書かれているかを見ましょう。「洗盤の口はささえの内側にあつて、一キュビト上に出ており、その口は丸く、花模様の細工があつて、一キュビト半あり、また、その口の上にも彫刻がしてあり、わくの鏡板は四角で、丸くなかつた。」「洗盤の口」とあるのは、丸い器の形をしている洗盤の縁のことです。ここにも花模様が施されていました。

もう一度整理します。29 節には、「雄獅子、牛、ケルビム、花模様」が出て来ました。それが 36 節では、「ケルビム、雄獅子、なつめやしの木、花模様」になる。最初ところには牛がいたのに、次の所には牛はいなくてその代わりになつめやしの木になる。この二つにはさまれる形で洗盤の口がある。ここはこのような順番で書かれています。

3) 全焼のいけにえ

洗盤は、全焼のいけにえを連れて来て、それを焼く前にそそぎ清めるための水を入れておくところです。どんな動物が全焼のいけにえとなつたか。レビ記 1 章 2 節を読みます。

「イスラエル人に告げて言え。もし、あなたがたが【主】にささげ物をささげるときは、だれでも、家畜の中から牛か羊をそのささげ物としてささげなければならない。」すこしとんで 9 節。「内臓と足は、水で洗わなければならない。祭司はこれら全部を祭壇の上で全焼のいけにえとして焼いて煙にする。これは、【主】へのなだめのかおりの火によるささげ物である。」

牛か羊が神殿に連れて来られて、全焼のい

けにえとなりました。

4) 洗盤の使用目的を細工で刻む

こんなふうに考えてみたらどうでしょうか。電気製品を買うと操作説明書がついてきて、この製品がなんのために使うものであるのか、使用目的がわかるようになっていきます。でも、いけにえをささげるという作業はどうでしょうか。いったい何のためにいけにえをささげるのか。最初はわかっているつもりでも、時間が経ち、人が代わり何度も繰り返すうちに習慣となってしまうと、肝心な意味や目的がわからなくなることがあります。そうならないように、何十年も何百年も後の時代の人たちでもわかるようにするにはどうしたらよいか。紙の操作説明書ではまったく安心できない。ぼろぼろになって読めなくなったり、なくなる可能性もある。どこかに保管してしまえば、保管したことさえ忘れてしまうでしょう。一番良いのは、使う場所に形に刻んでしまうことです。そうすれば、その模様を見るたびに、使用目的を思い起こすことができます。

3 天の御国に迎えられる

1) 全焼のいけにえとなつめやしの木

そうしますと、ここに記されている細々とした模様の意味は次のようになる。まず、全焼のいけにえとして焼かれるために牛が連れて来られる。洗盤の水で内蔵と足を洗って完全に焼く。その結果、牛は見えなくなり、なつめやしの木が見えてくる。では、なつめやしの木は何を意味するのか。

イスラエルでは水は貴重で、限られた場所ではしか手に入りません。どうやって水を見つけるか。実は難しくない。というのは、水の

あるところに木が生えているからです。一目でわかる。たとえば、エリコという町があります。まるで砂漠の中のアオシスのように水が豊富な場所で、なつめやしの木が沢山生えていました。背の高い木ですから遠くからでもすぐわかる。イスラエルの民たちがエジプトから脱出し荒野を旅したとき、水が最大の問題となりました。なつめやしの木が茂るところに来て休んだということが何度か出て来ます。なつめやしの木は、いのちそのものを現していると言っていいでしょう。

2) 全焼のいけにえとなられたイエス・キリスト

牛の内臓と足が洗盤の水で清められ焼かれ、罪が赦される。そしてなつめやしの木に象徴される救いをいただく。ソロモンはこのことを絵で示したと考えられます。

でもどうでしょうか、いま私たちは牛を焼くようなことはしません。なぜしないのか。そのことがヘブル書9章13、14節に書かれています。「もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにする」とすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしょうか。」

主はダビデに約束されました。「ダビデの世継ぎの子として来られる方が、一つの家を建てる。」ソロモンは、神のからだを象徴する神殿を建てましたが、それは人の手で造ったものでしたから、不十分なものに過ぎません。ダビデの子孫として来られたイエス・キリストが十字架におかかりになったとき、神

殿は完全に崩されます。しかしこの方が三日目によみがえられたとき、崩されることのない完全な神殿を建ててくださいました。

3) 神殿の左右に配置する

最後になりましたが、神殿の左右にそれぞれお五台ずつ洗盤を置いた意味について触れておきたいと思います。台にはきちんとした車輪がついていて、すぐに移動できるようになっています。このような構造になっていることにも深い意味があります。

罪の贖いと救いはどこでおこなわれるのかです。あそこに行かなければならない。こうしないと救われない。場所や手段に決めごとがあるのではない。あなたが今いるその場で、あなたがもし救われたいと願うのならば、そこにこの洗盤を載せた台車が運ばれてくる。そこであなたの罪のためにあなたに代わって全焼のいけにえが焼かれていく。イエス・キリストがあなたの罪を贖ってくれる。それが洗盤のある場所です。その洗盤の向こう側に神殿が建っています。罪赦された者はそこに迎えられます。その神殿に入ったとき、何が見えるか。神殿の壁には、なつめやしの木の形が彫り込まれていました。いのちの水が豊かに流れ、なつめやしの木が生い茂る天の御国があなたを迎える。だからあなたもこの洗盤のところに来なさい。救いの場所は神殿の周りのどこにでも用意されているから。主はそのように語りかけてくださいます。

その恵みを覚えて感謝します。